

イサム・ノグチ作《死(リンチされた人体)》に見る人種差別へのまなざし

内山 尚子 お茶の水女子大学

本発表は、イサム・ノグチ(1904-1988)の彫刻作品《死(リンチされた人体)》(1934年、ニューヨーク、イサム・ノグチ庭園美術館所蔵)に関して、ノグチ自身への人種差別に着目する従来の研究がほとんど論じてこなかった作品の造形的特徴を、作品のイメージ・ソース及び周辺作例との比較から新たに考察することにより、作品自体が人種差別をどのように告発したのかを明らかにする。

大恐慌の時代のアメリカにおいて、アフリカ系住民に対する人種差別とそれに伴うリンチの増加は、重大な社会問題であった。こうした中、ノグチは、アメリカ南部で実際に起きたあるリンチ事件を題材に《死》を制作した。1935年のニューヨークにおいて、ノグチが、自身の個展に加え、全米有色人種地位向上協会及び共産党のジョン・リード・クラブの主催する反リンチを掲げる二つの展覧会にこれを出品すると、半抽象的な作品の様式にもかかわらず、その行き過ぎたリアリズムが批判に晒された。先行研究では、こうした否定的な批評には、人種的マイノリティとしてのノグチに対する人種差別的まなざしが通底していると指摘されるが、作品の造形的特質自体がなぜリアリズムという評価を招いたのかという問題についても、展示のコンテクストにおいて検討する必要があるだろう。

ノグチ自身が認めるように、《死》は、雑誌『レイバー・ディフェンダー』の記事に掲載された一枚の写真に基づいている。しかし、二次元の写真から三次元の彫刻への翻案により、ノグチの作品は、単にリンチの悲劇を描写するにとどまることなく、リンチの恐怖を身体感覚的に鑑賞者に突きつけるものとなった。《死》が出品された二つの反リンチの展覧会では、南部の後進性及び資本主義社会の格差が招く人種間の軋轢が、リンチの要因として指摘された。しかしノグチの彫刻は、元の雑誌記事にも記されていたこうしたリンチの背景を描かないばかりか、「南部」を演出する舞台装置であった木のモチーフを絞首台に置き換えることにより、リンチを南部の出来事として他者化する北部の鑑賞者の想定を裏切るものとなった。台座を用いた従来の彫刻の展示方法ではなく、本物のロープで絞首台から吊るされる本作は、もはや物語の舞台設定を失ったリンチの被害者を、鑑賞者の目の前に突きつけて見せた。批評家が指摘したリアリズムは、彫刻という媒体の選択により、主題であるリンチ事件が、南部というコンテクストを捨て去り、即物的に展示室で示されたことに起因すると考えられる。

本発表は、南部の問題として人種差別を捉えるニューヨークの反リンチ運動のレトリックに、ノグチの彫刻作品が批判的に切り込む様を読み解くものである。芸術の社会性を模索する当時のアメリカの美術界に対し、彫刻という媒体にこだわりながらノグチが提示したひとつの答えを、パリ留学以来彼が抱き続けていた彫刻のモダニズムへの関心とともに繙いてゆきたい。

(うちやま・なおこ)